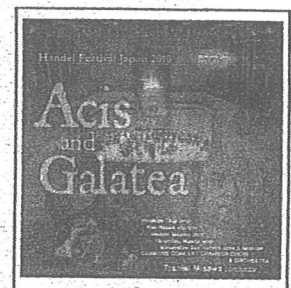
第８回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン《エイシスとガラテア》ライヴ録音 CD 評
矢澤孝樹氏『レコード芸術』2011 年８月号「プレ・レビュー」

ヘンデルの真髄へアプローチ 期待高まる日本での〝受容〟

三澤寿喜指揮キャノンズ・コンサート室内管、他による ヘンデル：《エイシスとガラテア》の録音が登場！



ヘンデル：マスク《エイシスとガラテア》
三澤寿喜指揮キャノンズ・コンサート室内o＆同cho,辻裕久(T)広瀬奈緒(S)牧野正人(Bs)前田ヒロミツ(T)、他
〈録音：2011年1月(L)〉
〔HFJ〈ヘンデル・フェスティバル・ジャパン〉ⓒHFJCD1001-2（2枚組）〕

Takaki Yazawa 矢澤孝樹

解釈を深めた再演 真の「ヘンデル像」

だいぶ前、ある古楽系マネジメントの方と、日本におけるＪ・Ｓ・バッハとヘンデルとの人気の落差について語り合ったことがある。前者に人気が集中してしまうのは、その求道者的な音楽が、基本的に生真面目な日本人の心に訴えるところ大なのだろうか、それに比べてヘンデルは享楽性が強すぎるのか、云々。「ヘンデル・フェスティバル・ジャパン」音楽祭で演奏された《エイシスとガラテア》のライヴ盤を聴きながら、そんなことをふと思い出した。この曲が、すべて日本人の独唱者、合唱、ピリオド楽器オーケストラによって演奏・録音されるなど、20年前だったら考えにくかったろう。そのころ胎動と誕生を迎えようとしていたバッハ・コレギウム・ジャパンによるＪ・Ｓ・バッハのカンタータ全曲演奏／録音は、今や世界的な評価を受けながら大団円に近づいている。ヘンデルの声楽曲に対する日本人からの発言も、もっとあっていい。

それだけに、２００３年から活動を開始した「ヘンデル・フェスティバル・ジャパン」の録音が登場するのは喜ばしい。我が国のヘンデル研究の第一人者である三澤寿喜が実行委員長を務めるこのフェスティヴァル、演奏の主体はキャノンズ・コンサート室内管弦楽団および合唱団。ヘンデルゆかりの演奏団体に名を求めるこの団体によって、「《メサイア》に偏りがちなヘンデル像を正す」（ブックレット紹介から）べく、《復活》、《ヘラクレス》、《陽気の人、ふさぎの人、中庸の人》等の声楽曲を積極的に紹介している。ヘンデルの英語オラトリオの序章である１７１８年の仮面劇《エイシスとガラテア》は、フェスティヴァルの記念すべき第１回に取り上げられた曲目で、７年ぶりの再演により解釈を深めた演奏を、最初の録音として世に問うという意図だろう。前回は渡邊孝の指揮だったが、今回は三澤寿喜自らが演奏を率いる。

徹底した指揮ぶり、寄り添う歌手とアンサンブル

若手から中堅の演奏家を中心としたキャノンズ・コンサートは、管弦楽、合唱共に指揮者の意図が隅々まで徹底している。近年の劇的・濃厚なヘンデル演奏とは一線を画し、明度の高い響きを主体に各声部を小気味よいテンポと運動性の中へ解き放ってゆく解釈は、１９８０年代のホグウッドやピノックら英国古楽演奏の蘇りを感じさせる。田園を舞台にくり広げられる恋人たちの牧歌的な恋と悲劇を演ずる辻裕久と広瀬奈緒の２人も、様式をしっかり押さえた歌唱で、アンサンブルとの親和性が高い。ポリフェーモを歌うヴェテラン牧野正人がさすがの貫録。たとえばダンディン・コンソート盤などの鮮烈さは希薄だが、中庸な解釈の中で日本人ヘンデル演奏の高水準を十分に示した価値ある録音だろう。それだけに、ライヴでなくセッション録音でいっそう精度を高める余地はあったと思う。一方ブックレットも演奏家全員の紹介がある一方で楽曲解説に割かれたページ数があまりに少ないのが惜しまれる。せっかく歌詞対訳が載っているだけに、聴き手のヘンデルや楽曲に対する理解をより深める配慮が制作側にほしかったところだ。経費的な問題はあるだろうが、ヘンデルをより身近な存在にするためにも。